

デジタル田園都市国家構想実現に向けた地域幸福度 (Well-Being) 指標活用について

デジタル庁国民向けサービスグループ 参事官補佐
 鈴木 ミユキ



1 はじめに

デジタル庁では、地域の豊かさをそのままに都市と同じまたは違った利便性と魅力を備えた、魅力溢れる新たな地域づくりを目指す、デジタル田園都市国家構想の実現を推進しています。具体的には「暮らし」や「産業」等の領域で、デジタルの力で新たなサービスや共助のビジネスモデルを生み出しながらデジタルの恩恵を地域に届けることを目指しています。この構想において地域幸福度 (Well-Being) 指標 (以下、地域幸福度指標) の活用が進められています。

これまでのまちづくりでは地域全体の目指す価値観の明示が不十分で、目的や取組も十分に整合されていませんでした。事業ごとにKPIが設定されており、相互の関連性が低いものもありました。一方、地域幸福度指標は包括的な指標であり、地域全体のウェルビーイング向上に向けた取組の共通指標として利用することで価値観や目的をすり合わせ、複数サービスの円滑な連携を図ることができます。また、地域幸福度指標の活用をコミュニケーションのきっかけとすることで、地域全体の目指したい姿の検

討がより具体的になり、産学官市民を含め地域の様々なプレイヤーの協力を引き出すことが可能となります。そして、地域幸福度指標をKPIとして持つことで、地域の様々なプレイヤーが自分たちの活動を評価しやすくなるという効果も期待できます。(図1)

2 人口減少と共助

人口減少のトレンド (図2) をご覧ください。現在は人口減少の始まりの部分に位置しています。これからジェットコースターの下降のように一気に人口が減少していく社会へ

図1

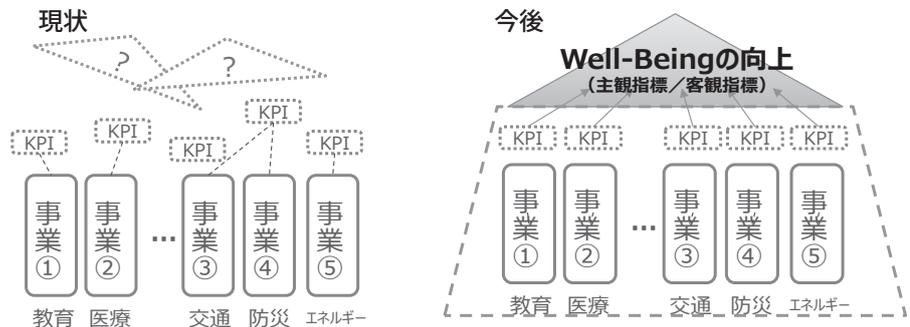
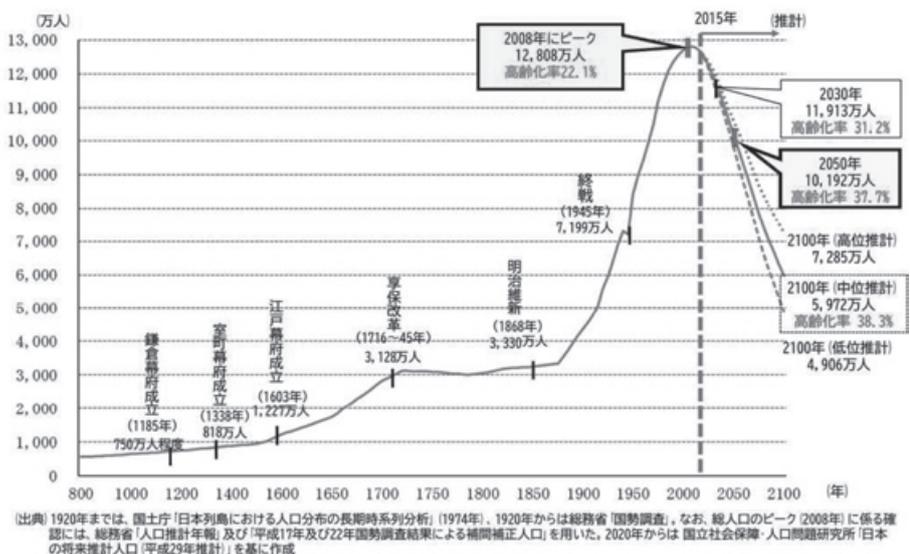


図2



向かっていく、そのようにグラフから見て取れるのではないのでしょうか。グラフで見ればほんの少しの振れ幅ですが、1945年終戦のところで人口が減っています。この時でも地域社会の運営は非常に大変だったと先輩たちからお聞きしています。これからの人口減少を考えた時、私たちはどのような地域社会を未来を担う世代に残していったらよいのでしょうか。

人口増加社会と人口減少社会では世の中の仕組みが変わります。例えば、これまでの人口増加社会は「乗客がバス停で定時運行のバスを待つ」、つまり需要が供給に合わせる世界でした。他方、人口減少社会では「迎える車が乗客の都合に合わせる」、つまり供給が需要に合わせる世界です。自治体が担う行政サービスも同様に、これまでは住民が役所に行き、手続きすることが当たり前でしたが、これからはオンラインで通知を受け取り、自宅で手続きできることが一般的になるでしょう。既にマイナポータルを活用した引っ越し手続きでは、転出と転入の二度役所に行っていた手続きが、転入時の一度だけ役所に行けばよくなりました。これからはデジタルの力を活用し、供給側が需要側に合わせるサービスを提供することが重要です。何が欲しいお客がどこに居るのか、といった需要側の要求をリアルタイムで把握し、それに供給を合わせなければサービス水準は維持できません。

住民の多様な生活ニーズや価値観に寄り添うサービスをデジタル技術によって提供するには、複数のサービス企業が積極的に協力し支え合うデジタル生活基盤の再構築が必要となります。1社では回収の見込めないデジタル投資は困難なため、共用できるものへの共同投資が必要になってきますが、共同投資の実現は容易ではありません。

地域幸福度指標は共助のデジタル生活基盤を実現するツールとして有効です。この基盤づくりを成功させるには、利用者の目線に立ち、行政のみならず様々な主体の参画が必要です。地域幸福度指標の計測と指標を活用したワークショップ（以下、WS）等により利用

者目線の暮らしの価値を官民で一緒に見つけ出し、様々な主体の納得感を得ながら共助の領域を広げていくことが必要不可欠です。

3 地域幸福度 (Well-Being) 指標の概要

地域幸福度指標は、各種統計データを評価し分野間などの比較に用いる「客観指標」と、市民等へのアンケート調査結果を指標化し、時系列での比較に強い「主観指標」から構成されています。

客観指標はオープンデータで構成されており、政府各府省庁の協力により240以上のデータが網羅的に提供されています。

客観指標と主観指標は「生活環境」、「地域の人間関係」、「自分らしい生き方」という3つのカテゴリーから成り立ち、カテゴリーの整合を行うことでウェルビーイングを示す総合的な指標とのレイヤー（層）構造としてわかりやすく構成されています。例えば交通分野では、客観指標は駅またはバス停徒歩圏人口カバー率などであり、主観指標では「公共交通機関で好きな時に好きなところへ移動ができる」というアンケート結果と結び付けて考えることができます。その上の層にある総合的指標は、各地域における政策とその政策インパクトとして表れる市民の幸福感とを結んでいます。

指標の計測結果はレーダーチャートで表し、それぞれの街の多様な性格を視覚的に表示しています。全国調査の結果から偏差値化することで異なるカテゴリーのものの比較を可能としています。エリア間の比較が目的ではないためランキング付けなどは行わないこととしています。ランキング付けはまちづくりをする人のモチベーションにつながらないと考えており、これは指標活用の検討当初から大切にしている考え方です。指標を活用する皆様にはご理解いただきたい点です。

4 地域幸福度 (Well-Being) 指標全国調査

デジタル庁では主観指標の基礎となる地域

果から抽出された地域の課題と各分野の政策の関係を政策効果の観点からロジックツリーに落とし込み、強化すべき政策の分析を行う活動を進めます。

特に自治体の皆さんに取り組んでいただきたいのが、当事者意識を生む仕掛けとしての、指標を活用したWSの開催です。行政が政策を決定し通知しただけでは、当事者がいないまま事業が進んでいくため、まず市民や企業を参加者としてWSを開催し、デジタル生活基盤を構築する初期段階に考えるべきまちの強みやニーズを共に確認します。事業の進捗とともにWS参加者を増やしなが、指標を共通言語に、目指す将来像に向かい進んでいきます。指標を使い事業とまちづくりのつながりを発信することで、地域への資金調達を作り出す可能性も高まります。また、職員対象のWSの実施は、庁内の事業への理解促進にもつながります。デジタル庁では令和5年度に実施したモデルWSのプログラムと資料を公開しており、令和6年秋頃には自治体のWS開催を支援するファシリテーター紹介・派遣制度を開始します。ぜひご活用ください。

令和5年度、自治体を対象に指標活用の課題に関する調査をしました。全国600団体の回答結果では、指標を活用していない理由の1位が「活用方法がわからない」、2位が「活用したいが通常業務が忙しく、手が回らない」、3位が「費用が確保できない」でした。これを踏まえ、デジタル庁ではアンケート調査を実施する自治体の業務及び費用負担の軽減とともに回答する住民の負荷軽減のため、共通サービスとしての自治体アンケート調査支援システムをサイトに追加する形で開発中です。

このアンケートシステムの機能を一部ご紹介します。標準アンケート50問の実施に加え、自治体の独自設問も設定可能です。また、一人一票であることを正しく確認するため、認証アプリとの連携による真正性・公平性を保つ機能の活用も自治体の選択により可能です。自治体もデジタル庁もアンケート回答者の回答の特定はできません。デジタル庁が確認できるのは利用団体の状況とアンケートの進捗

状況です。回答はパソコンまたはスマートフォンからできます。この機能は令和6年秋頃のリリースを目指しており、デジタルの力で自治体のアンケート実施を支援します。

7 先進的な活用事例

先進的な指標活用事例をご紹介します。

まず、会津若松市では、第3期会津若松市まち・ひと・しごと創生総合戦略でKPIに加え事業効果の検証を行うツールとして地域幸福度指標を位置づけ、活用することとしています。次に浜松市では、職員研修を通じ指標活用について理解を深め、官民連携組織浜松市モビリティサービス推進コンソーシアム等でのWS開催を通じ地域の事業者の巻き込みや、浜松ウェルビーイングアワードにより事業者の取組を後押し、市民のウェルビーイング向上に向け実績を積み上げています。また、ウェルビーイングの視点を取り入れた総合計画基本計画を策定中です。その他の団体においても、次年度事業の決定に指標分析結果を活用する、企業版ふるさと納税への説明資料として指標を用いる、などの活用が進んでいます。

8 おわりに

指標活用を進めるにあたり不明な点やご相談などありましたら相談窓口へ気軽にご相談ください。地域幸福度 (Well-Being) 指標活用に関する問合せ窓口 <https://well-being.digital.go.jp/contact>

※本稿は令和6年9月執筆

著者略歴

鈴木 ミユキ (すずき・みゆき)

2022年4月静岡県菊川市役所から派遣でデジタル庁に入庁し、デジタル田園都市国家構想におけるWell-Being指標活用を推進している。入庁早々、駅の階段で転倒し骨折。菊川市では、土木から児童福祉まで28年間経験。2017年地域支援課長、2020年商工観光課長。行政へのデータ活用の必要性を強く感じ一念発起し、静岡大学大学院総合科学研究科情報学専攻に入学、現在現役の学生。流行りのリカレントとリスキリングを両立するため、骨は折っても心は折らずに奮闘中。WBPD OASIS Practitioner。